

Gの政治考



Gの政治考は
公式サイトで更新中です。
<http://gaun-yoshinao.com/>



2018.4.30

メディアガーデンからの光景

自宅のマンションから歩いてすぐの場所に、日没の少し前に足を運びたくなるスポットができました。地元新聞社が松本の都心にオープンした複合型施設「信毎メディアガーデン」の3階にある、オープンテラスです。小学校から帰って近くの広場へ遊びに行き、日が沈む間際になると、母親が「夕飯できたよ～」と呼びに来た、僕にとっての原風景が蘇ります。



この場所は、伊勢町通りと本町通りという長らく松本を代表してきた商店街が交差する地点に位置します。伊勢町通りは、昭和60年から始まった土地区画整理事業で、「水と緑、ゆとりとうるおいのある街」を目指し、車道が拡幅され、広い歩道が整備され、電線が地中化されました。松本市のホームページには、「18年の歳月と官民合わせて900億円を超える巨費を投じ、新世紀にふさわしい商都・松本の顔が誕生しました」と記述されています。しかし、

現実には、幅を広げた車道で商店街が分断された形になり、せせらぎや街路樹を整備した歩道も人通りを増やすことに大きな効果を上げているとは言い難い状況でした。

そのため、新聞社を中心にショップやレストランが入った新しい建物ができても、松本の市街地を変えるだけのインパクトがあるとは思っていませんでした。1か月ほど前から、木材をふんだんにあしらった外観を目にする機会が増え、テナントの詳細が明らかになっても、印象は変わりませんでした。それでも一度は見に行こうと思い、オープンした日の夕方、足を運びました。1階のスペースと2階のテナントをぐるっと回ったあと、3階へ上がると、「松本ブルワリー」のカウンターの先に設けられたオープンテラスが目に入りました。ビールを飲まなくてもいいのかなと思いつつながらドアを開けて足を踏み入れると、手すり越しに広がる光景に釘付けとなりました。

僕と同じように、手すりにもたれかかってオープンテラスからの光景を愉しんでいる人たちが大勢いました。若い女性が「ここから見ると都会っぽいな」と一緒に来た男性に話しかけていました。本当にそうでした。建物に向かってまっすぐ伸びている伊勢町通りが、きらび

やかに見えました。広いことがマイナスに作用していた車道も歩道も、ここから見ると魅力的に映りました。メディアガーデンに向かって歩いてくる人が楽しそうに見えたのも、気のせいではないように思います。

別の女性は、「山って、こんなに近いんだね」と呟いていました。夕映えの北アルプスの稜線は、伊勢町通りの行き当たりには浮かび上がっているように見えました。松本の街が美しい山並みに囲まれていること、松本こそ都会と田舎のバランスの取れた暮らしができる街であることを、日常的に実感させてくれる光景です。電線の地中化を戦略的に進めれば、こうした「借景」に至るところで堪能できる街になるだろうと思います。

メディアガーデンのオープンには、都心回帰の意義と風景の価値を再認識する契機になるはずですが、松本で最高の景色を眺めることができる「松本城東隣の市役所用地」について、どのように活用することが最も適切なのかを改めて議論することにも、いずれ繋がっていくと思います。平成最後の年にできたオープンテラスからの光景には、2020年以降の松本の街づくりのヒントが詰まっています。

臥雲の会 事務局
〒390-0811
長野県松本市中央1丁目2-24
電話 0263-36-7343
Fax 0263-50-6727
E-mail info@gaun-y.com

編集後記

西日本豪雨で被害に遭った皆様に心よりお見舞い申し上げます。連日の酷暑、皆さまお変わりありませんか。古く「松本のまちは、殿様と神様が作ったもの以外、良いものは何もない」などと言われるようですが、城は多くの外国人旅行者を惹きつけ街を活気づけています。また、山は降雨量をセーブし、猛暑の夏でも朝夕は涼しい風を届けてくれます。この恵まれた地の利に感謝し、明日は西日本豪雨の被災地にボランティアに行って参ります。(くり)

2018
7

vol.8

Lの視点で、Gの時代を穿つ

G通信

臥雲義尚 × リポート

臥雲は日々何を考え、活動しているのか。
その横顔と頭の中を覗けるニュースレターです。

経済と向き合い、未来へ投資する

西日本の豪雨災害は、日本にとって大きな転換点だった、とのちに振り返る出来事になるような気がします。これまで私は、「気候変動」という言葉をどこか他人事として受け止めてきました。年々夏は暑くなり、35度を超すのが当たり前、日本全体が亜熱帯気候になってきた、と口にはしていましたが、人間の生き方や社会のあり方を根本から変える必要があるとまでは思い至っていなかったと思います。しかし、今回の豪雨災害を目の当たりにして、もう異常気象とは呼べない、これが未来の日常なんだ、と身にしみて感じます。

松本は、市街地の標高が600メートルあまり、日本一高い地点に位置する人口20万以上の都市です。3000メートル級の山に囲まれた盆地特有の気候で、最高気温が35度を超す真夏でも、朝夕は温度が下がり熱帯夜はほとんどありません。市内の四方には一級河川が流れ、幾度か浸水の被害をもたらしてきましたが、北アルプスが盾になって、台風による被害は最小限にとどまっています。フォッサマグナの上に位置するリスクと向き合いながら、こうした地政学的特長を都市としての強みにできるかどうかが問われる時代を迎えています。

NHKを辞めて松本に戻って2年半が経ち、自分が一番変化したと感じるのは、下り坂への向き合い方、とりわけ経済の観点です。たとえ人口が減少局面に入っても、いや減少局面に入ったからこそ、経済的な豊かさを諦めてはいけないのではないかと。健全な経済成長を促しながら、生活の質や社会の自由度や文化の多様性を高めていこう。そうした思いを日々強くしています。そして、松本は、それを実現するために必要な条件や環境にどの都市よりも恵まれています。緩慢なる衰退から逃れ、活気ある地方のトップランナーになる可能性を備えています。

ここへ来て、10年以上前に着手した松本城の外堀を復元する事業が、用地の土壌汚染を理由に事実上中止となりました。旧鉄工所跡地への移転を目指す市立病院の建設計画も、土地の取得交渉が難航して先行き不透明な状況です。市民の福祉を高め、将来の税収を増やすために、これから何をすべきなのか、一度立ち止まって大局を整理し直す時期に来ていると思います。先端的なデジタル技術を最大限活用して、情報・交通・エネルギーのインフラを整備し、環境・教育・福祉の未来へ投資することが必要です。城下町松本の「ニューディール」へ動き出します。

臥雲義尚

“ 時空を超越するホームランと豪速球。
大谷翔平は野球の素晴らしさを体現する ”
「臥雲義尚FBより」

＼日々更新中／

臥雲の日常と横顔

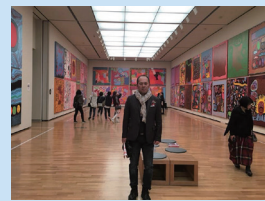


Facebook



4月～6月 主な投稿記事

- 4/12 議会報告会は市民感覚と乖離
- 4/14 野中広務さんお別れ会に参列
- 4/21 **55歳に草間彌生展から熱量 a**
- 4/27 開山祭の上高地で自然を堪能
- 4/28 都心回帰へ信毎MGオープン
- 4/29 常念を望む児童園で草むしり
- 5/18 中核市移行＝保健所新設なぜ
- 5/26 クラフトフェアは今年も盛況
- 6/ 2 マスターズ甲子園の予選出場
- 6/ 5 **乳がん啓発に保育園で人形劇 b**
- 6/ 8 寿小「にこにこルーム」が3倍に
- 6/15 松本歌舞伎『切られの与三』観劇
- 6/24 「こいこい松本」留学生と交流 c
- 6/30 ママフェスに集う子育て世代



a



b



c

55歳になりました。変化、発展、自由、情熱、多様性。より良い方向へ行くための重大な変化が起こりつつあると感じています。同郷の前衛芸術家、草間彌生さんの作品群からも、たくさんのエネルギーをもらいました。2020年に松本を大きく動かすために、変化を恐れず、前へ前へ進む1年にする覚悟です。

白板保育園で人形劇を観てきました。病気で胸を失くしたおばあさんと5歳の孫の話です。乳がん検診で乳房を摘出した人たちのために手作りパッドの普及を図っている女性グループが企画しました。「もう下着を着て、お風呂に入らなくていいね」というセリフで終わるまで、園児たちは背筋を伸ばしてジーッと見入っていました。病気について何かを心に刻んでくれたと思います。

松本が世界の中心になったと錯覚してしまうような時間と空間でした。僕もその一員に加えてもらったモンゴル班は、11人全員が信州大学の留学生。みんな聡明で魅力的な若者でした。モンゴルではおよそ3分の1が中学から私立学校に通い、第2外国語として日本語か中国語か朝鮮語を学ぶとのこと。留学先に信州大学を選んだ彼らは、未来の松本の宝です。

M 松本ジセダイプロジェクト

「9.9クロストーク 御厨貴×臥雲義尚」

ここ2年間、平日夜に、あわせて20回、「ジセダイと語る松本のプライド」を開催してきました。松本に生きる“ジセダイ”と共に、燦し銀に輝く“プライド”をいくつも掘り起こすことができたと思っています。これからも、松本の未来を見据えて、世代を超えた大勢の皆さんと多事争論し、有意義な提案をしていきたいと考えています。その節目を刻むイベントとして、来る9月9日には『クロストーク 御厨貴×臥雲義尚』を企画しました。ぜひご参加ください。（詳しくは、チラシをご覧ください）「松本プライドプロジェクト」は更に進化し、「松本ジセダイプロジェクト」として活動を広げていきます。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。



4/27

工芸を暮らしに散りばめる ～クラフトフェアの先にあるもの～

第18回のゲストには、松本を象徴するイベント「クラフトフェア」と「工芸の五月」を主宰する、石匠・伊藤博敏さんを迎え、ものづくりの心意気を伺いました。松本が“工芸の発信の場”としての地位を築いたのは、「城を造るためにいろいろな技を持った人たちが各地から集まってきた“吹きだまりの街”だからである」という伊藤さんの持論に納得しました。



5/30

障害者の“大学”を創りたい ～みんなの gift を生かす社会へ～



第19回は、ダウン症の子を持つ母であり、知的障害者が18歳以降も学べる学校を創ることを目指す「ぷろじくとギフト」代表の古畑裕子さんを迎えました。明確な目標を掲げてオープンなマインドで突き進む古畑さんに刺激され、参加した皆さんも、自分なりの考えを発言し、異なる意見に耳を傾け、障害者への理解を深める機会になりました。

6/28

STAY の魅力を高めよう ～ホテルとインバウンドの未来～

第20回は、ホテルブエナビスタなどを経営する、東洋観光事業の代表取締役、小林史成さんと、松本の宿泊と観光について多様な視点から意見を交わしました。「世界基準の観光都市に必要なことは」との問いには、“発信力”をいの一歩に上げ、インバウンドの誘致には「同じ方向を向いて、エリアで取り組んでいく」ことの重要性を指摘しました。



次代を
にう 若者×臥雲

ジセダイと語る 松本のプライド

ジセダイトーク

臥雲の Facebook コメントより

工芸とは何か、松本と工芸の関わり、などについて、じっくりと話を伺うことができました。伊藤さんが目指すのは、松本を「工芸の街」にすること。高尚な美術ではなく、生活や実用と結びついた工芸こそ、“微妙な寛容の街”松本に相応しい、と。多様な人たちが混じり合い、暮らしの中に豊かさとしが散りばめられる街を、ぜひ作っていききたいと思います。

現在の特別支援学校では、社会で活躍するためのスキルやコミュニケーション力を身につけることができない。ならば、シルバーと企業を巻き込み、卒業した後にそれが可能となる学校を創るしかない…。40人を超える参加者の大半は、障害者の教育が今のままではいけない、支援から自立へ、松本から変えていこう、という気持ちになったのではないのでしょうか。

松本に来ている外国人旅行者が何を求めているのか、このままではインバウンドの通過点に留まってしまう、滞在型観光の拠点へとアップデートするには何が必要か。通訳、民泊、フォトグラフ、様々な立場で松本のSTAYに携わる人々から、たくさんのヒントが出されました。松本を「世界基準の観光都市」にする未来への意思を強めることができました。